

## 上野殿御返事

鷲目一貫文送り給び了んぬ。

御心ざしの候へば申し候ぞ。よくふかき御房とおぼしめす事なかれ。  
仏にやすやすとなる事の候ぞ、をしへまいらせ候はん。人のものををしふると申す  
は、車のおもけれども油をぬりてまわり、ふねを水にうかべてゆきやすきやうにをしへ  
候なり。仏になりやすき事は別のやう候はず。早魃にかわけるものに水をあたへ、寒氷  
にこぼへたるものに火をあたふるがごとし。又、二つなき物を人にあたへ、命のたゆる  
に人のせにあふがごとし。

(一五二八頁)

本抄は弘安三年(二二八〇年)十二月二十七日、日蓮大聖人様御年五十九歳の時にお住  
まいの身延の地より南条時光殿に与えられたお手紙であります。御真筆は現存していま  
せんが、第二祖日興上人の御写本が、総本山大石寺に所蔵されています。

当時、駿河の地では、まだまだ、三障四魔・三類の強敵の烈風が吹き荒れていました。  
その地であって、時光殿が、なにもものにも揺るがない信心を確立し、逆境に打ち勝つ信  
仰を貫いてほしい。これが大聖人の願いであられたと思われれます。

されば、本抄の内容は、時光殿が自身の苦境をも顧みず、身延にお住まいの大聖人様  
のもとへ「錢一貫文」の尊い御供養を申し上げたのに対して、金色王、須達長者、利吒尊者  
等の故事を引かれて、南条時光殿が法華経の行者である大聖人様に御供養される功德が  
いかに大きいかをお述べになられ、時に当たって示された尊い信心の真心こそ成仏の直  
道に叶うことをお教えになつているお手紙であります。

本抄は初めに南条時光殿から送り届けられた鷲目一貫文の尊い御供養に対してお礼を  
述べられ、この金品に託された信心の真心を称えられて、このような真心こそが成仏へ  
の直道であることを御教示になられ、また初めの御心ざしの候へば申し候ぞ。よくふ  
かき御房とおぼしめす事なかれ」とは、こうした真心の御供養が成仏の道であることを  
述べられるのでありますが、だからといって、さらに供養をするようにと催促している  
欲深い僧だとは思わないでほしい、あなたから真心の御供養があったので、それを称え  
て云うのですよ、との意味で、初めに申されているのであります。

そして、次に大聖人様は、時光殿に 仏に、やすやすと成る方法があるので、教えて差  
し上げましょう」と仰っているのであります。

即ち、仏に成る道とは、決して上から無理強いしたり、強制したりすることでは  
ないことを示されています。つまり、誰でも幸福に成れる道、しかも、やすやすと成れ  
る道、その道を教えようと云われているのです。

この前年のお手紙で、大聖人は、熱原の法難で奮闘する時光を 上野賢人」と讃嘆さ  
れ 願はくは我が弟子等、大願ををこせ」(二四二八頁)とも激励されているのです。

この仰せのままに時光も、必死に戦ってきました。それ故に、大聖人様は、仏にや

すやすとなる事の候ぞ、をしへまいらせ候はん。」と、仰せになつていたのであります。つまり、誰でも幸福に成れる道、しかも、やすやすと成れる道、その道を教えようと申されているのであります。即ち、物事の道理を教えて下さつていゝのです。

それは、**大にものを教える**とは **車と船**を譬えに用いられて、人は、それぞれ重荷(様々な宿業)を負つて人生を生きていかなければならないのである故、あくまで当人が負わなければならぬ荷であり、当人が自分で進んでいかなければならぬ道である故、ものを教えてあげると言うのは、その当人の責任と権利を尊重しつつ、自信もつて軽やかに進めるようにしてあげることが大事なことで、**車が重い場合はその荷物を減らして軽くする**のでもなく、**押したり引いたりあげる**のでもなく、**車輪に油を塗つて(正しい修行法を教える)回転をよくしてあげる**ことですよ」と教えられ、又、**ぶね**を水に浮かべてゆきやすきやう」とは、船は陸地では進むことが出来ない、船を水に浮かべれば軽くなるし、**円滑に進む**ことができるために、**氷に浮かべ**るとは正しい基盤を教えてあげることである、と仰せになつていゝのであります。

されば、**仏にたやすく成る方法**は特別なことではありません。たとえば、日照りの時、喉の、**渴いた者に水を与え、寒氷に凍えた者に火を与える**ようなものである。また、二つとない物を人に与え、**飢えて命が絶えようとして**いる時に、**人の施しに値う**ようなものである。」と御教示になつていゝのであります。

逆境の中で苦闘する時光にとつて、これ以上ありがたい仰せはありません。

この前年のお手紙で、大聖人は、熱原の法難で奮闘する時光を **上野賢人**と讃嘆され、**願はくは我が弟子等、大願ををこせ**」(二四二八頁)とも激励されています。この仰せのままに時光も、必死に戦つてきました。客観的に見れば、時光が、成仏への確かな道を歩んでいゝことは間違いありません。

このように大聖人は、**人にものを教える**ということ、つまり、**本人が前進しやすいようにしてあげること**であつて、あくまでも進むのは本人次第です。誰もが、尊い仏性を抱いていゝのですから、ここでは、その方法を御教示下さつていゝのであります。

**宿命転換の原理**も同じです。宿命には、どこまでも本人が自らの力で立ち向かつていかなければならないのであつて、自身の中に、あらゆる宿命を転換する力があると気づけば、直面していゝ逆境に意味を見いだしていゝことができます。即ち **宿命**を **使命**へと変えていゝことができるのです。

そして、大聖人は拝読の御文で、**渴ける者に水を、凍える者に火を与える**ような志をもつて、**法華經の行者へ御供養**することが、**重要な仏道修行となる旨**を教えられ、また、**御心ざしの候へば申し候ぞ。よくふかき御房とおぼしめす事なかれ**。」(二五二八)と仰せられて、御供養の大事を説くことは、時光自身の成仏のためであると念を押されているのであります。

当時の時光は、**わが身はのるべき馬なし、妻子はひきかゝるべき衣なし**」(同二五二九)

とのごとく、窮乏生活を強いられていました。それでも常に、大聖人の教えに素直に信順して不借身命の実践を貫き、大聖人外護の御供養にも懸命に励んでいたのであります。総本山第二十六世日寛上人は、金沢法華講衆に対し「たとへ山のごとく財をつみ候ひて御供養候とも、若し信心なくばせんなき事なるべし。たとへ一滴塵なりとも信心誠あらば大果報を得べし」松任次兵衛殿御報」と、信心の発露として誠意を尽くし、御供養をする意義を教示されています。私達は、仏宝・法宝・僧宝の三宝への報恩行として、さらに自身の功德善根を積む修行として、真心の御供養に努めることが大切です。

拝読の御文には「大のものをしふると申すは、車のおもけれども油をぬりてまわり、ふねを水にうかべてゆきやすきやうにをしへ候なり」と仰せです。このお言葉を仏道修行の実践に当てはめるならば、未だ信心していない人に対しては、真の幸福を得るには邪法を捨てて正法に帰依するしかない」と折伏していくことであり、すでに入信している人には、信心活動が停滞することなく、進み易くするように育成していく事となります。

折伏と育成の基本は、まず自身が仏法上の正しい師に任せ、身をもって正法を実践することが前提となります。総本山第二十二世日俊上人が、師は針の如く檀那と弟子は糸の如し」（法華取要抄註記・歴全三一―一九二）と仰せられるように、私達は、御法主人猊下の御指南を根本に、自行化他の信心に励み、妙法広布へ進んでまいりましょう。

日如上人猊下は

「普段着の折伏」と言いますけれども、大聖人様の教えが正しいことをそのままお伝えしていくのです。もし相手が邪宗教を信じていたならば、それが間違いであることを指摘すればいいのです。大聖人様の教えが正しいのですよ」と言うこと、このひとつとが大事なのです。そのひとつとから折伏が始まり、すべてが解決していくのです。それを躊躇して何も言わなければ、自行化他の信心のうちの自行はよくても、化他がだめですから、本当の信心にはなっていないのです。」大日蓮・令和五年九月号）と御指南になっています。

今月は、盂蘭盆会の月です。盂蘭盆会の法要やお寺の行事には家族そろって参詣しましょう。そして又、未入信の身近な親類・縁者とも交流を図り、一日も早く正法に導けるよう精進していくことが肝要です。皆で自行化他にわたる修行を心掛け、一家和楽の信心を構築してまいりましょう。

（令和六年八月度・御講の砌）